
クールな彼氏。 3

零雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クールな彼氏。 3

【Nコード】

N9778J

【作者名】

零雅

【あらすじ】

クールな彼氏。 第三段です。

「ダメよ、そんなんじゃ」

「いや…」

「いくらあんたが単純だつていねえ…」

「えっと…」

「たまには焦らせてやらなきゃ」

「いや、そうじゃなくて…」

「よっし、決めた!!」

「今から作戦会議よ!!」

「だからそーじゃなくてえ…」

「問答無用!」

「名づけて!! 幼馴染彼女にドッキリ大作戦!!」

「 柚奈…」

決してあたしのせいではないんだ。

全部、元を正せば新のせい。

関係ないとまでは言わないけど、少なくともあたしのせいではないんだ…。

自分にそう言い聞かせるものの、偉大なる女王様の大作戦は止まってはくれない。

「まずは亜雪を…」

さっきからなにやらぶつぶつ呟いてる。

内容は怖いから出来るだけ聞かないことにする。

発端は、あたしが柚奈に色々和新とのことを話しちゃったこと。

や、あたしだってまさかこんなことになるとは…。

「ダメね、あんた完全に新君に振り回されっぱなしじゃない」

「そ、そんなこと言ったってえ〜…」

昼休みの教室。

語尾が消え入りそうな声をだすあたしにすかさず渴をいれる柚奈。

そう、ここ最近、（いや、思い返せば付き合う前もだけど

完全無欠のクールな幼馴染に振り回されっぱなしなんです。

「あたしだって好きで振り回されてるわけじゃ…!!」

「甘い、そんなこと言ってるからいつまでたっても

振り回されっぱなしなのよ。

亜雪、今まで一回でも新君のこと振り回したことがある？」

覚えている限りでは一回も無い、…とは言えない。

「ま、どーせ亜雪のことだから一回どころか一瞬たりともそんな経験ないんだろっけど…」

わかってるなら聞かないでよ！

「だって…、振り回すつたつて…そーすればいいの？」

「待ってました！！その言葉を！！」

このさいだから新君のこと振り回してみなさいよ…！」

こー見えても、（いや、見ただ目通り

恋愛上級者な柚奈は時々あたしにこんな無理難題を言う。

「ええ！？

無理でしょそんなの！！

自慢じゃないけどあたしが恋愛初心者なの知ってるでしょ？」

見ただ目通り恋愛初心者なあたしは全力で反論。

「大丈夫！！

あたしが全力でサポートしてあげるから！！」

ね？と、可愛くウイंकする柚奈。

このパターンは…

「じゃああたしの指示通りに動きなさいよ？」

不適に笑う柚奈。

このパターンは…絶対にやらされるパターンだっ…!!

なんでだろう？

あたしの行いが悪かったのかなあ???

思わずここ最近の自分の行動をチェックしてみる。

うん、これといって異常ない。

じゃあやっぱり新のせい？

そうだ、絶対そうだ…。

「
」

なにやらカチャカチャと楽しそうに鼻歌を歌いながら着々と用意を進める柚奈。

その手元にあるもの。

「いくら作戦だからって…」

「なに言ってるの、作戦だからこそやるんでしょ？」

その手元にあるのは柚奈のメイク道具。

そう、なにやらいままで化粧つ気ゼロだったあたしにメイクをさせたいらしい。

…言いたい何をたくらんでいるんだろうか？この人は…。

おまけに昨日の今日で、現在時刻は朝の7時半。

あたしの家は学校は近いから15分もあれば歩いて余裕で行く。

つまり柚奈わざわざあたしにメイクをさせるために早く来たってわけ。

「…あの、柚奈さん？」

そろそろ何をするのか教えていただきたいんですが」

実行するのはあたしなのにまだ全く作戦の内容を聞いていない。

「しょうがないわねえ…。

つまりいい？

新君を焦らせるにはあんたが可愛くなつて周りをあつと驚かせるのよ」

「…うん、それで？」

しょうもない作戦のような気もするけど一様続きを聞く。

「新君はもてるでしょ？」

それもものすごく。

それで前は亜雪が焦らされてたわけだし。

だからそれをそのままそっくり新君にやり返すの。

亜雪が急にモテモテになれば否応なしに心配するでしょ？」

ものすごく良い作戦だと言つように語る柚奈の作戦にあたしは愕然。

「あのね、柚奈」

「何？バツチリの作戦でしょ？」

「それって、つまりあたしがモテることが前提なわけでしょ？」

「そつよ、当たり前じゃない」

「じゃあ絶対無理だよ…！」

自慢じゃないけど生まれてこの方モテたことなんて一度も無いよ？

そりゃ柚奈は美人だしさぞ簡単そつに言うけど…。

あたしじゃ絶対に無理だつて!!

「はあ…」

あたしの台詞を聞いて呆れたとばかりにため息をつく柚奈。

「亜雪、何のためにあたしがわざわざこんな時間にあんたの家にいると思ってるの？」

「…すつごくやだけど、メイクするため」

「そうよ、メイクはすごいよ!？」

大丈夫!! 亜雪、結構可愛いしちょっとメイクすればすごくよくなるはず!!

さあ!! 新君を振り回しちゃえ!!

「無、無理だつてええええ!!」

「つべこべ言わずにあたしにメイクさせる!!」

だ、誰か助けてえええ!!

「ふう…もう嫌…」

柚奈にすっかりメイクされ、ただいま教室にいるあたし。

…なんていうけど。

「…恥ずい…」

はっきりいってこの格好じゃ、へたに教室から出られない。

ってというか動き回れない。

柚奈に強制されたのは実はメイクだけじゃない。

短くされたスカート。

今時の感じにセットされた髪型。

極め付けに柚奈一押し of 制服の着こなし。

格好だけはものすごく可愛く仕立て上げられたあたし。

でも、でもさ絶対に…。

…似合うはずが無いっ！！

今日は柚奈と一緒にいつもよりずいぶん早く登校したから教室にはまだチラホラとしか人がいない。

それが救い。

まだチャンスはある。

出来れば朝練組が帰ってくる前にこのメイクを綺麗に落として

髪の毛ほどいて、スカートの丈もとにもどして…。

なんて思っけど、はつきりいって袖奈に見つかったときが怖い。

…まあ、あたしにも権利あるよね？

大丈夫、大丈夫、ダイジョウブ…。

「はよっす」

「おーおはよ」

「今日の宿題やったー？」

な、何！？

早くもみんなが来始めちゃった…！！

もうつつぶ状態のあたし。

でも、そんなささやかな願いも叶わず…。

「亜雪ちゃん？何してるのかな？」

こ、怖い〜!!!

上から降ってくる柚奈の声にそろりそろりと顔を上げると

「あたしの作戦が台無しになっちゃうでしょ?」

にっこりと微笑んだ表情。

でも、念のため言っておくとそれはあたしを祝福してくれているよ
うな笑顔じゃなくて

「はい、学校中歩いてきなさい」

あたしを貶めるような悪魔の笑顔…。

「は、はい…」

机からしぶしぶ立ち上がるあたしをニコニコと手を振って見送る柚
奈。

この悪魔…!!!

そんなことを思っていた矢先、思いがけないことが起きた。

「あ、悪い」

軽くぶつかってきた男子。

柚奈を睨みつけていた視線を前に戻すとそこにはクラスの竹下君。

これはこれで新ほどじゃないけどさうとうモテる人。

「え…?」

目を丸くして何かにおどろく竹下君。

も、もしかして、今のあたし驚くほど変?

「お前、遊沢だよな…?」

「う、うん…一様」

ハハハ、ときこちなく笑うあたし。

や、やばい!!ものすごく逃げたい…!!

そんなあたしをよそにまじまじとあたしを見る。

そして一言。

「お前その姿、新に見せたか?」

「ま、まさかあ!!こんなの見せられるわけ無いでしょ!!」

半ば切れ気味のあたし。

もう嫌だ…。

あたしのさっきの叫びのせいか、クラスの人の視線が集まってくる。

「えっと…あたし、今ものすごく変だよね？」

「や、変じゃねえけど…むしろ」

「むしろ？」

「つか、早く新に会ってきた方がいいぜ」

「え、あ、うん」

結局そのくらい変なのか聞けないままあたしは教室をでた。

ちなみに今日は柚奈に連行されてまだ新にはあっていない。

てか、絶対に会いたくない…！

なのに。

「うわあ〜誰あいつ…！」

「あんな人、うちの学年にいたっけ？」

「俺、見たことねえよ！」

あらゆるところから飛んでくる視線、視線、視線。

い、痛い…！

今のあたしならこの視線で焼き殺されることが出来るようなきがし

た。

とはいえ、歩かないとトイレにはいけない。

だからもう半ば開き直り気味に廊下を歩く。

指差してきた奴にはさすがにむかついたけど。

どンドン歩いていくと気だるそうに歩く姿が見えた。

こゝ、これはやばいって、本当に！！

遠くからでも分かる。

あの姿は絶対に新だっ！！

勝手に先に学校に来た上に、こんな格好してたら絶対に可笑しいと思われる。

あたしはくるりと新が来る方向に背を向けると、もうダッシュ！

いつもよりスカートが短いから全力疾走は無理だけどこのペースで走れば新だつてあたしに気づかないはず。

とりあえず人のいないところを選んで走った。

そしてついたのは屋上。

一息ついてベンチに座る。

「ハア…」

これからどうしよう…。

教室にいったら新に会っちゃうし。

かといってメイク落としていったら袖奈にキレられるし。

遊沢 亜雪、ただいま人生最大のピンチ…！

一人であわあわしてると、突然屋上の扉が開いた。

そこにたっていたのは本日二度目にお目にかかります。

「あ、新…」

一見無表情に見える新の表情。

でも、あたしは幼馴染。

この表情は確実に…怒っていらっしやる…！

怒りに満ちた表情を崩さないまま新はあたしの隣に座った。

「何、先に行ってたんだよ」

一瞬何のこと？と思ったけど、たぶん今日、勝手に先に家を出てきたことだ。

付き合いだす前からいつも一緒にいったただけにその怒りは大きい。

それ以上しゃべらず、俯き気味に視線をはずす新にあたしはおお焦り。

「えっと…!!」

それには色々と言がありまして…」

必死で弁解しようにもだいたいこついうときの新は人の言い訳を全く聞いてくれない。

今回もそうだろうと言いつつ言い訳をやめて黙り込むあたし。

「訳って、その格好？」

「え？格好って…」

わ、忘れてたあああ!!

新の登場に早稲ってこの格好のままだったことを完全に忘れた。

聞いてもらえないと分かりながらも弁解せずにはいられないあたし。

「えっと、その…これはあたしがやったんじゃなくて…」

す、すぐ落とそうと思ってたんだよ？本当は!!

変だし…似合わないし…でも新が来ちゃうし…」

「俺のせいってわけ？」

「や…!!…そうじゃなくてですね…うう…」

もう返す言葉もない。

ここはもうひたすらに謝るしかない。

「本当にごめんっ!!」

今すぐ全部直してくるからちょっと待ってて!!」

そうさけんでベンチからたとつとするあたしの腕を新が掴んだ。

「お前、俺が何に怒ってるかわかってねえだろ？」

「え?えっと、先に学校に行ったこと…変な格好してること?」

「ハア…マジでムカつく」

ええ?そんなこといわれても意味わかんないよ。

「えっと…じゃあなんで怒ってる……て、新ああ!??」

しゃべってる途中で強く腕を引っ張られる。

抵抗も出来ないままあたしはすっぽり新の腕の中。

やばっ、不意打ちでめっちゃ顔赤い…。

「先にいったことは別に後でいい。」

なんでこんな格好してんだ？」

ふっと新が腕の力を緩める。

「あの…その…」

しかたなくあたしはそのわけを全部話した。

ああ…袖奈のこと恨んでやる。

「やっぱりな」

「何が？」

「お前にそんな確なことができるわけないだろ」

「む…」

そりゃメイクなんてしたことないし、こんな作戦あたしじゃおもいつかないでどね…！

「もう絶対にこんなことすんな」

「はい…」

なんかしつけられてるみたい…。

新に怒られるとあたしはいつもしゅんとしてしまっつ。

しかも付き合いだしてから怒られたの初めてだし。

なんかちよつと泣きそう…。

「何なみだ目になってんだよ」

そういつて新はあたしの頭を撫でた。

あたしは前回で頬赤いだろうけど、新も微かに顔を赤らめている。

なんだか無性にその姿が可愛く思えて、あたしは思わず新に抱きついた。

それがすごく不意打ちだったのか、

「お、おい！」

ちよつとだけ焦ってるようにも思えた。

これって、もしかして作戦成功？

へへつと笑って、顔を上げると、同じように綺麗に微笑んだ新の顔があった。

新はあたしのあごに手を掛けるとキスし始めた。

軽いキスからどんどんと変わっていく角度。

息苦しくなるほど長いキス。

こんなの始めてかも…。

それが終わって肩で息を吸い込む。

苦しくてちよつとなみだ目気味。

「そんなに苦しいか？」

「うん、ちよつと…」

微かに笑ってみる。

「悪いけど」

「ん？」

「止まんねえ…」

再び新がキスをする。

ちよつとだけ苦しいキスからはいつも伝わりにくい新の気持ちさが
ごく伝わってきた。

「やばっ、もう一時間目始まつちゃうよ!」

キスし終わって気づいたらもうそんな時間になっていた。

「別にいいだろ、そんなの」

「よ、よくないってえ」

ふいに顔を近づけてくる新。

そして耳元でささやく。

「サボろうぜ?」

いつも以上に甘い声に思わず頷きそうになった。

でも、

「ダメだって!!あたし成績悪いんだから!!」

むっと不満そうな顔になる。

しかも不穏な言葉月。

「覚悟しとけよ」

新が不機嫌なまま教室に戻ると、まだ先生は来てなかった。

よかったあ~~~~、と思ったのもつかの間。

俺たちの仕業」

新はみようによつてはいつもの無表情だけどあたしからみたら完全に怒ってる…!!

てか、これて柚奈だけの作戦じゃないの？

「ごめん、亜雪。

でも、うまく行つたでしょ？」

可愛く笑う柚奈。

……ムカつくつ。

柚奈を睨みつけていると、新のよく通る声が教室に響いた。

「まあいい、太一、テメエは後で殺す。

その前に……」

その前に？

誰もが固唾を呑んで見守つた瞬間。

あたしは強い力で肩を引かれて倒れこんだ。

…新の中に。

「こいつ、俺のだから」

一瞬クラスが静まり返った。

と思つた瞬間クラス銃から冷やかしの声や黄色い歓声。

え？え？ええええ！？

新つてこんなキャラじゃないよね！？

どうしちゃったわけ！？

新の腕の力が緩んで解放されたあたしに柚奈が言う。

「ほらね？作戦大成功」

「何なのよこれっ！！」

どこが作戦成功なのよ！！」

「大成功じゃない。

普段の新君だつたら絶対にこんなことしないでしょ？

でも新君好みの亜雪がモテモテなのを見たらいてもたつてもいられなくて焦つたつてわけ。

それに亜雪、新君にキスされたでしょ？」

「なな、なんでそれを？」

「やっぱり、亜雪を独り占めしたくて必死だったんでしょ。
可愛いじゃない」

「か、可愛くなあーい!!」

未だにクラスから飛んでくる冷やかし。

それがようやく収まったのは先生が来た後だった。

「あ、新？」

「んだよ」

帰り道。

やっとあたし達への冷やかしが終わったと思ったたらもう下校の時間
だった。

なんていつか…一言で言つと…気まずい。

朝の人騒動から全くしゃべってないあたし達。

と、言うよりしゃべる隙がないほど質問攻めだった。

それと…新の好みのこと。

今思い出すだけでも結構恥ずかしい。

朝の格好から柚奈の提案、というより脅迫で結局直すことが出来なかった。

てか…新の好みって今まで全く知らなかったかも…。

これは…喜んでいいのかな？

一人首をかしげていると、

「なに一人で百面相してんだよ」

「なっ！！し、してない！！」

嫌ああゝ、もしかして顔に出たの！？

…この際だし、ずばりきいちゃおうかな？

「あの子…」

あたしが言葉を言い切るまでの沈黙。

自分の中で決心をする。

「新の好みって…こーいう格好なの？」

ちよつと顔を伏せながら、新の方を見上げる。

今思うと、こーいう格好ってあたしには無縁だったんだよね。

なんかひそかにシヨック。

「…別に」

「だって、竹下君が言ってたじゃん」

「んなの信じてんじゃねーよ」

バツサリと切られる。

「つか…」

「ん？」

「覚悟しとけてって言ったよな？」

「うん、言われたけど…あれってどーいうこと？」

「こーいう意味」

その言葉をまた聞き返そうとした瞬間、もうキスされる一歩手前の状態だった。

「覚悟しとけてって言っただろ」

言い終わった途端の甘いキス。

不意打ちにクラっとする。

少しだけ唇を離してあたしの顔を除きこむ新の不敵な笑顔に更に顔を赤くする。

「なに赤くなってるんだよ」

そのまま、またキスを落とされる。

屋上でした時と同じくらい苦しい。

でも、「うー」。

路上だよっ!?!?

もう暗いけど…。

誰か来たら絶対にバレるよ…。

こんな余裕な新が焦るはずないっ。

そんなあたしの気持ち察したのか、新が囁く。

「俺を焦らそうなんて、100年早えんだよ。バーカ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9778j/>

クールな彼氏。 3

2011年10月5日18時52分発行